

「斬／KILL」

2009（平成21）年1月20日鑑賞<テ

アトル梅田>

総監修：押井守

2008年・日本映画・82分

配給／デイズ

OPENING

監督：押井守

ヘテカ（女神）／MELL

<売りはチャンバラ！そして押井守総監修！>

2008年の第65回ベネチア国際映画祭へ出品された押井守監督の『スカイ・クロラ』（08年）は、北野武監督の『アキレスと亀』（08年）、宮崎駿監督の『崖の上のポニョ』（08年）と共に受賞はならなかったが、1951年生まれ

の押井守監督が世界的巨匠であることは周知の事実。『斬／KILL』の売りはチャンバラと刀！そして押井守が総監修をつとめ、チャンバラをテーマとして自分自身の他、若手3人の監督に好きに作品をつくらせたこと。1つのテーマで数人の監督が個性と出来を競い合うオムニバス映画は結構面白い試みだが、さてこの映画の個性と出来は？

第1話『キリコ』 ★★

監督・脚本・撮影・編集：辻本貴則

キリコ（キリナの妹）／森田彩華

クモタニ（組織のボス）／山口祥行

ドクター・シテ／池田成志

キリナ（女殺し屋）／水野美紀（特別出演）

<キリコとキリナの殺陣は？>

セーラー服姿の薬師丸ひろ子が機関銃を抱えてヤクザ組織に乗り込み、それを乱射するシーンは、「カイカン！」のセリフとともに一世を風靡したが、この映画のようにうら若き女性が刀を持って単身ヤクザ組織に殴り込み、バツバツと斬り倒すには、それなりのカッコ良さが必要。映画の冒頭それを演ずるのが姉のキリナ（水野美紀）、そしてラストに再び同じようなシーンを演ずるのが、クモタニ（山口祥行）から銃で頭部を撃ち抜かれながら、ドクター・シテ（池田成志）の手術によって甦った妹のキリコ（森田彩華）。冒頭のシーンでは卑怯な手でキリナ、キリコ姉妹を始末してしまったクモタニだったが、最後のハイライトシーンではキリコの挑戦を刀で受けている。そこで問題は、これらの殺陣がどこまで魅力的か？あるいは観るに耐えるか？だが、私の目にはイマイチ。姉妹共よく頑張っているのだが、やっぱりこの程度では・・・？

<気味の悪いキャラにウンザリ>

1971年生まれ

の辻本貴則監督は、チャンバラ劇にストーリー性をもたせるためにドクター・シテの手術によってキリコが甦るという手法をとった。つまり、キリコが殴り込みをかける時、頭に白い包帯を巻いているのがミソだ。しかし、この包帯をとった後、額に残る縫い痕のキズを見るとせつかくのかわい顔が台なし。そのうえ、悪戦苦闘の末やっとクモタニを切り殺したにもかかわらず、別のクモタニがいたとは一体ナニ？そんなワケのわからないドクター・シテの気味の悪いキャラにウンザリ・・・。

第2話『ごども侍』 ★★☆☆

監督：深作健太

机龍太郎（小学6年生）／溝口琢矢

師直（クラスのリーダー）／木村耕二

百合乃（華道部部长）／今野真菜

机小枝（龍太郎の妹）／大野百花

塩冶（龍太郎のクラスメイト）／神林秀太

活動弁士、大正琴演奏／山崎バニラ

<紙芝居風の無声映画の仕立てに感心！>

1972年生まれ

の深作健太監督は『ごども侍』を、紙芝居風の無声映画仕立て

で完成させた。紙芝居や無声映画の場合、登場人物以上に重要なのは、語り手（活動弁士）の能力。セリフはスクリーン上に表示されるが、それをいかにストーリーの流れに応じてドラマティックに語るかが、作品の出来を大きく左右するわけだ。この映画の活動弁士となるのは山崎バニラだが、その語りは実にお見事！

<タイムリーなテーマ設定に感心！>

小中学校におけるいじめ問題はどんどん深刻化しているが、小学6年生の机龍太郎（溝口琢矢）が引越してきた母親の故郷の小学校にもいじめ問題があるようだ。妹の小枝（大野百花）と共に元気に小学校に通い始めた龍太郎だが、クラスメイトの塩冶（神林秀太）がクラスリーダーの師直（木村耕二）からいじめられていることを知った龍太郎が、ある日塩冶をかばったことから問題が発生。

他方、武門の生まれで礼儀正しくかつやさしい龍太郎に一目惚れ（？）したが、クラスのマドンナ百合乃（今野真菜）だから、龍太郎は幸せ者。しかし、「剣をとっては日本一」の赤胴鈴之助を彷彿させる龍太郎は、過去のある過ちによって剣を封印していたから、今後師直との闘いをいかに展開し、どう決着をつけるの？

第3話『妖刀射程』 ★★☆☆

監督・脚本：田原実

久住晃一（警視庁特殊部隊SATの精鋭）／石垣佑磨

岩倉忠靖（兵士）／辻本一樹

<刀+銃=妖刀？>

これが監督デビュー作となる1971年生まれ

の田原実監督が『妖刀射程』で描いたのは、刀+銃=妖刀というイメージ。刀は武士の命という思想は日本では根強いが、それはあくまで銃が登場するまでの間。ちなみに、坂本龍馬だって北辰一刀流の達人でありながら、ある時期からはいつも懐にピストルを忍ばせていたのだから・・・？

押井守監督はこの企画に参集した若手監督に対して、「刀を魅力的に扱え」「刀を色っぽく撮れよな」と言ったらしい。その表現は「愛を込めて描く」「色気」「艶」「情緒」「物心性」などいろいろなキーワードで語られているが、そんな押井守監督の熱い思いを最も忠実に体現させたのが、『妖刀射程』の田原実監督。押井守監督自身の『ASSAULT GIRL2』でも刀の形状や飾りに大きなこだわりを見せているが、田原実監督の刀+銃=妖刀という発想のオリジナリティは最高！

<ストーリー展開は荒削り？>

刀+銃=妖刀という発想は秀逸だが、残念ながら妖刀という言葉が持ついくつかのイメージは既に日本語として定着している。したがってこの映画でも、「いにしえの時代、稀代の刀匠によって打ち出され、戦乱の世においては名刀と称えられた太刀。だがその刀は、まるで意志を持つかのように持つ者に取り憑いては暴挙を繰り返し、幾多の生き血を吸い続け、いつの日か『妖刀』と呼ばれるようになる」という一般的な説明が不可欠。

しかして、そこからいかにして明治末期の兵士岩倉（辻本一樹）と、警視庁特殊部隊SATの精鋭久住（石垣佑磨）との「妖刀対決」のクライマックスにストーリーをもっていくの？そのストーリー展開は荒削り？

<正邪不明が面白い>

今や大相撲は白鵬=善玉、朝青龍=悪玉というイメージが定着してしまったから、その対決では圧倒的に白鵬の応援が多いのは当然。しかし、かつての宮本武蔵VS佐々木小次郎の対決では、どちらかという佐々木小次郎が善玉で、宮本武蔵が悪玉だったはず？

他方、平成7（1995）年の若貴横綱対決では両者とも善玉だったが、『妖刀射程』での久住と岩倉の対決は、どちらが善玉で、どちらが悪玉？それがわからず、一見両者とも悪玉に見えるところが面白い。もっとも同じ妖刀でも、久住は大刀を使用し、岩倉は小刀を使用しているから、どちらかという久住の方が有利と思えるが、さて妖刀対決の勝者は？そして勝者が決まった後、SATの精鋭が踏み込んできたところで起きる、あつと驚く結末とは？

第4話『ASSAULT GIRL2』 ★★☆☆

監督・脚本：押井守

ミカエル（暗殺者）／藤田陽子

ルシフェル（女囚）／菊地凜子

<テーマは深遠、長剣の美女は何者？>

押井守監督がキリスト教徒かどうかは知らないが、いきなり字幕に「ふたりの天使 両手にありて汝を守護す 右手にあるは善に導き、左手にあるは悪へ誘う 『前工ノク書 66-06』」と表示されるから、これから展開される映像はそんな深遠なテーマなの？

チャンバラをテーマとし、「刀を魅力的に」とこだわった押井守監督作品は、セリフなしで、冒頭に登場するのは、荒野の中を1人長剣を持って歩く美女ミカエル（藤田陽子）。戦闘服らしきその服装はファッショナブルだが、この美女は一体何者？また、彼女は雨の降り注ぐ荒野の中、一体何を待ち、何と闘っているの？そこに現れた一台の装甲車の前に立ちはだかったミカエルは、長剣でその装甲車を一刀両断に・・・。なるほど、なるほど・・・？

<黒装束の美女は何者？>

装甲車の破片の陰から突然姿を現したのが、黒装束の美女ルシフェル（菊地凜子）。よく見ると彼女の両手は組み合わされ、その上に黒のロングコートを着ている。その後この2人の美女対決が始まるわけだが、ミカエルは長剣を抜くのに対し、ルシフェルは両手を組んだまま。しかも、ルシフェルには武器がない。これでは圧倒的にルシフェルが不利だが、なぜこんなハンディキャップマッチに？

映画鑑賞後にパンフレットを読んでではじめてわかったのは、ルシフェルの黒い服は拘束衣だったこと、そしてルシフェルは女囚だったこと。つまり、これは「宿命の刃を担う者とその刃に落とされる者との闘い」だったわけだが、スクリーン上から一体誰がそこまで理解できるの？

<美女対決の行方は？>

さらに不思議なのは、美女対決の行方。『キリコ』では善玉と悪玉がハッキリしているから勝者は明らかだが、『妖刀射程』では勝者は不明。そうすると、「美女対決」は？

ミカエルはきっと善玉だから負けるはずはないが、『斬／KILL』というタイトルからすればルシフェルを斬り捨ててしまうの？それではルシフェル役に菊地凜子を起用した意味がないのでは？そんな疑問を持ちながら、ミカエルとルシフェルの殺陣（というよりダンス？）を固唾を呑んで見守っていると、そこにはあつと驚く結末が訪れる。それはあなた自身の目で。

ちなみに、『ASSAULT GIRL』とは「闘う女」という意味だが、このタイトルは映画のイメージとうまく合致していないのでは？